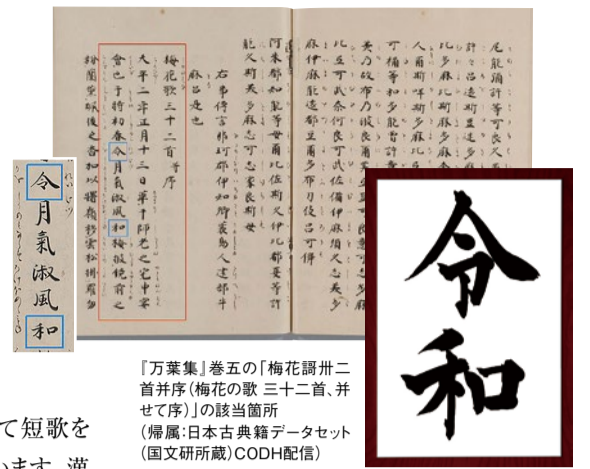


新コーナー
CULTURE コラム
VOL.1

北摂・阪神間で歌われた万葉集などをもとに、梅花女子大学教授の市瀬雅之先生による、地元の歴史をめぐるコラムがスタートします。第1回は序章として、梅花と令和についてご執筆いただきました。

梅花から「令和」を込めて



「万葉集」巻五の「梅花調卅二首并序(梅花の歌三十二首、并せて序)」の該当箇所(帰属:日本古典籍データベース(国文研所蔵)CODH配信)

あちらこちらの行事で「令和元年」を目にします。「令和」と書く機会も増えました。新しい元号が、『万葉集』から採択されたことはニュース等でご存じだと思います。

『万葉集』は、日本に現在残っているもっとも古い歌集です。二十巻に約四千五百首が記されています。「令和」は、巻五の「梅花宴歌(ばいかえんか)三十二首并(あわ)せて序」の序文から選ばれました。歌に序文を記すことは一般的なことではなく、奈良時代の作歌でも新たな試みでした。

その内容は、「天平二年(七三〇)正月十三日に、大宰府(だざいふ)の長官であった大伴旅人(おおとものたびと)の邸



宅に集まって、宴会を催した。折しも、初春の正月の令(よ)い月で、気候はく風が和(やわ)らいでいる。」と書き起こされた箇所から、「令」と「和」の二文字が選ばれました。これだけでなぜ?と尋ねられそうですね。序文には続きがあります。「梅は鏡の前の白粉(おしろい)のように白く咲き、蘭は匂い袋のように香っている。」以下は省きますが、美しい景物が書き並べられているところに、新たな春の到来が祝われています。そこに催される宴も「心は淡々として自在で、思いは快然として自然に充足している。」とのびやかです。序文はその気持ちを言葉で表現するところまでを求めています。漢詩には落梅

を詠むが、今回は園梅を題として短歌を作ろうと呼びかけて閉じられています。漢詩ではなく、歌で梅を詠むことを求めたところに趣向の新しさがあり、これが歌によって梅の詠まれるはじめともいわれています。春の到来を告げる美しい景物等によって新年が祝され、その心持はどこまでも自在であるばかりか、日本の伝統文化である歌世界を積極的に押し広げていこうとする姿勢には、私たちが「令和」という時代にありたいと思いたくなる示唆が含まれています。

序文は「昔も今も(風流を楽しむことに)何の違いがあろうか」とも記しています。「昔」を尋ねてみると、東晋の永和9年(三五三)三月三日、王羲之が四十一人を招いて曲水の宴を催したことを記す「蘭亭序」が「後世の見る人も、この文章に心を動かそうとすることであろう」と述べていることが想起されます。既にグローバル社会であった奈良時代にあっては、時空を越えて文雅の世界を楽しむ心が

結ばれています。それが歌に序文を添える形となっています。「令和」に結びつく表現はさらに古く、『文選(もんぜん)』(一～二世紀の詩文集)の巻十五に記された「帰田賦(きでんふ)」(後漢・張平子)に見出されます。読み比べてみると、「梅花宴歌三十二首」に記された序文には、作者自らが思い描く理想がうろわしく凜と記されていることに気づかされます。

梅花女子大学教授 市瀬 雅之

現代訳から原文までを用いて『万葉集』に文学を楽しむほか、『古事記』や『日本書紀』等に日本神話や説話、古代史をわかりやすく読み解く。中京大学大学院修了 博士(文学)。著書に『大伴家持論 文学と氏族伝統』おうふう 1997年、『万葉集編纂論』おうふう 2007年、『北大阪に眠る古代天皇と貴族たち 紀万葉の歴史と文学』梅花学園生涯学習センター公開講座ブックレット 2010年。ほか執筆・講演・講座多数



新コーナー
俳句
VOL.1

俳句のコーナーがはじまります

世界最短17音語の定型詩「俳句」は、日本が誇る伝統芸能のひとつです。最近では小中学校でも俳句コンテストがあったり、テレビ番組で俳句を添削するコーナーが人気だったり、俳句の魅力が幅広い世代に広がっているように思われます。

本紙でも、自然や季節感を楽しむ日本の俳句文化を大切にしたいと考え、俳句結社「秋草」を主宰する山口昭男さんを選者に迎え、俳句のコーナーを連載することにいたしました。

第一回は、山口昭男さんから本紙読者に向け「俳句の書きかた、はじめかた」をこの紙面上で教えていただきます。この記事をご参考に初めての方も俳句にチャレンジしていただければ幸いです。

あわせて読者の皆さんから俳句を募ります。応募された俳句から山口昭男さんが佳作を数点選び、その俳句を本紙とCityLife NEWSのホームページで紹介させていただきます。ぜひご応募をお待ちしております。詳細は下記の募集情報をご確認ください。

俳句を届けてくださる皆さんへ

はじめまして、この俳句のコーナーを担当する山口昭男と言います。これからよろしくお願ひします。

このコーナーに参加いただく方は、今から俳句を始めてみようと思う人、もうすでに俳句を作っている人などキャリアはそれぞれだと思います。それでも俳句に関わりたいという思いは共通しています。その思いを大切にしながら投句するみなさんと選者となる私とで気持ちの良い空間が出来上がればと願っています。

さて、俳句のことを話します。

私の俳句の先生の波多野爽波の有名な俳句です。この句、チューリップの花びらが外れかけているということだけです。俳句というのは、このように見たものを素直に詠うこ

とが一番大事なのです。言葉を知らないからとか感性が無いからということではなく、自然界にある姿をそのまま言葉にすれば、俳句が出来上がるということです。

この句も爽波先生のもので、小学校の教科書に載っていたので、知っている子どもがいるかもしれません。この句を読んだ時、前のチューリップの句と同じように、なんだこんな簡単なことと思われたことでしょうか。そうです。俳句は、こんな簡単なことで十分なのです。来る人を見ていて、みんな寒いので吐く息が白い。これが俳句となってゆくのです。

自然や人間をじっくり観察し、そこで何かを見つける。これが俳句の第一歩となります。難しい知識など必要ないのです。

それでは、初めての方に向けてのアドバイスを少しします。

一. 五七五音です

いまさらと思うかもしれませんが、これが肝心なのです。私たちは長い文章に慣れていて、どうしても説明的になってしまいます。その説明を削って削って、五音と七音と五音にしてゆきます。

二. 季語が入ります

ひとつの俳句に季語が一つ入ります。これから作られる方は、初秋の季語となります。

三. 歳時記が必要で

準備物は、鉛筆とノートですが、あと歳時記という本が必要です。書店の俳句コーナーに行けばたくさんの歳時記が置いてあります。高価なものはいりません。四季がすべて一冊に入っているものの方が、使いやすいと思います。

それでは、出来上がった俳句を届けてください。お待ちしております。 山口 昭男

選者 山口 昭男 (やまぐち あきお)



1955年 神戸市生まれ。1980年「青」に入会。波多野爽波に師事。2000年「ゆう」入会。田中裕明に師事。編集担当。2010年俳誌「秋草」を創刊し主宰する。毎月発行。句集に『書信』『讀本』『木簡』がある。2018年句集『木簡』で読売文学賞受賞。日本文藝家協会会員。

山口昭男先生の俳句
大根に大根の葉のはりつきぬ
見えてゐる水鉄砲の中の水
その人の母と話して天の川

【俳句の応募方法】

氏名・住所・年齢・明記のうえ、ハガキ、封書、FAX、下記の応募フォームのいずれかからご応募ください。

【宛先】

〒566-0001 大阪府摂津市千里丘1-13-23
株式会社シティライフNEW 俳句係まで
FAX 06-6368-3505

【応募フォーム】

<https://pro.form-mailer.jp/fms/f413b102177160>

※締め切りは毎月25日必着

※いずれも一人5句まで

※掲載は次々号となります

※佳作は掲載をもって発表とさせていただきます

※お名前と作品を掲載します。

